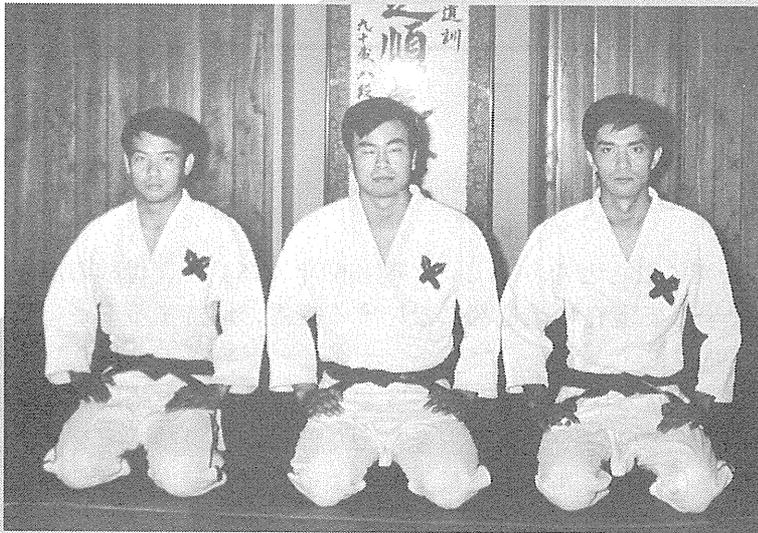


1977年度／昭和52年度（昭和52年4月～昭和53年3月）



役員

部長	阪埜 光男	
師範	清水 正一、清水 直臣、安藤 勝英	
	橋本 昇、青木 豊次	
監督	山際 正明	
主将	蓬萊 嘉治	
主務	伊藤 定史	
副将	佐藤 隆夫、植松 修一	
幹事	湯本 公庸、田城 幸雄	
学連委員	堀江 伸也	
体育会常任委員	忍足 正彦	
副務	森田 正利	
日吉高コーチ	高木啓一郎、羽鳥 信	
志木高コーチ	堀江 伸也	
普通部コーチ	三木 崇嗣	
中等部コーチ	木村 康治、山下 隆司	
幼稚舎コーチ	高輪 真澄	
合宿所主務	平川 典利	

柔道部の125周年に当たって

湯本 公庸

最近、木の太さを感じたことありますか？唐突に申し訳ありません。大阪から東京に20数年ぶりに戻り、ふと表参道を歩いたとき、並木の太さと高さの変化に驚き、若かりし時、いつも同じ太さと高さで迎えてくれた並木が、明らかに太く高く迎えてくれた驚き、それを感じた自分の時の流れ、結局、年を取った訳ですが。

普通部から大学に至る間、毎日、当たり前のように暮らした柔道部での日々、それは、日吉の道場の汗くさいロッカー、道場の入り口のちょっと重い扉、階下の4年が使っていた小部屋のベンチプレス、壁の鏡、ぶっ飛ばされて叩き付けられた壁の板、落ちて行く意識の底で眺めた畳の隙間、何かの間違いで決めてしまった移り腰の浮いた相手の恐怖の顔、合宿所の風呂焚き、矢上の坂を登れるか否かを賭けた寝静まった食堂での期末試験勉強、寒稽古の後の風呂の身体が融けて行くような心地よさ、ダッシュにおんぶの日吉の道場から矢上に向かう階段、三田の旧道場の丸太の渡し木、寒稽古で寝起きた剣道場の敷居の溝の綿埃、生意気な幼稚舎のガキども（いまは立派な「先輩」諸氏）、恐ろしい諸先輩のあの顔この顔、誰かが折って集めた交通標識、きりがありませんが。

あまり試合の思い出が出てこない理由は勘弁していただくとして、我々昭和53年率は、数人の少数で、長い柔道部の歴史の中でも、厳しい時代を支えた（？）と、少々自負し、見捨てず御指導下さった諸先生・先輩の方々に、支えて下さった後輩諸氏に、今でも深く深く感謝しております。

忙しさと、現役中は決して着くことの無かった己が贅肉にかまけて、ご無沙汰を続ける不埒な我が身ですが、木の太さを感じ、諸先輩からいただいたご恩を、何とか後輩諸氏にと、心改める今日この頃、125年という歴史の中ではほんの一部だったかも知れませんが、当たり前自分の暮らしであった柔道部が、自分を育て鍛えてくれた柔道部が、これからも太く高く発展する事を祈念いたします。

試 合 記 録

■第26回東京学生柔道優勝大会 昭和52年5月8日 日本武道館

1回戦	シ	ー	ド			出場者	忍足 植松 佐藤 立山 近藤 小田切 羽鳥 高木 竹内
2回戦	本		塾	5	-	1	東京農業大学
3回線	本		塾	0	-	5	拓殖大学

■第26回全日本学生柔道優勝大会昭和52年6月12日 日本武道館

1回戦	本		塾	5	-	0	出場者	蓬萊 忍足 植松 佐藤 立山 近藤 小田切 羽鳥 高木
2回戦	本		塾	1	-	5	大阪経済大学	
							天理大学	

■遠征試合 昭和52年8月

本	塾	9	-	6	山形県混合	
本	塾	10	-	1	東北学院大学	
本	塾	⑦	-	7	岩手県警	内容勝ち
本	塾	13	-	2	富士大学	
本	塾	8	-	0	富士大学	
本	塾	10	-	6	秋田混合	
本	塾	2	-	②	秋田県警	内容負け

■第29回 早慶対抗柔道戦 昭和52年10月10日 講道館

本	塾		-	○	早稲田大学 4人残し 優秀選手：佐藤隆夫、立山由生、小田切裕治
羽	鳥		引分け		川 上
平川 (宏)			横四方固め	○	後 藤
大 野			優勢	○	後 藤
鈴木 (武)			引分け		後 藤
加 治			引分け		喜 多
立 山	○		大内刈り		橋 本
立 山	○		大外刈り		横 田
立 山	○		優勢		東 浦
立 山			引分け		川 田
大 西			優勢	○	島 本
忍 足			内股	○	島 本
富 永			合せ技	○	島 本
加 藤			優勢	○	島 本
山 下			内股	○	島 本
長 島			浮腰	○	島 本
近 藤	○		優勢		島 本
近 藤			引分け		坪 井
鈴木 (和)			腰絞め	○	小 川
平 川 (典)			引分け		小 川
小 田 切	○		袖釣込み腰		小田桐
小 田 切			引分け		有 得
小 蓬			大外刈り	○	秋 元
高 木	○		内股		秋 元
高 木			袈裟固め	○	戸 部
佐 藤	○		払い巻き		戸 部
佐 藤			引分け		峯 岸
植 松	○		優勢		浅 見
植 松			優勢		大 平

三輪
梶原
内田

■第3回 東京学生柔道新人優勝大会 昭和52年11月

1回戦	本	塾	5	-	0	帝京大学 出場者	近藤	鈴木	小田切	立山	高木	加藤
2回戦	本	塾	0	-	4	大東文化大学						

慶應義塾体育会柔道部創立100周年記念 式典及び祝賀会式次第 昭和53年1月21日(土) 於

1. 式典 午後3時 於ホール

司会 長戸英夫
開会
塾歌斉唱
黙禱
挨拶 柔道部長 阪埜 光男
祝辞 塾長 石川 忠雄君
祝辞 体育会理事 金子 芳夫君
祝辞 三田体育会々長 早川 種三君
祝辞 早稲田大学柔道部OB 山本 秀雄氏
※感謝状贈呈
挨拶 師範代表 清水 正一君
挨拶 三田柔友会副会長 高木 忠祐
閉会
記念撮影
※感謝状贈呈 元柔道部師範 故中野正三君
柔道部師範 清水正一君
高等学校柔道部々長 黒田富夫君

1. 祝賀会 4時30分 於大食堂

司会 豊永 勝
開会
※記念品贈呈 三田柔友会 80才以上会員
※感謝状贈呈 部史編纂関係者
鏡割
乾杯 中野栄三郎君
中締 柔友会副会長 高木 忠祐
閉会
※記念品贈呈 中野栄三郎 岩崎清一郎
森 久則 山田 久一
松崎 達二 早川 種三
高橋 吉彦 柴谷 芳蔵
神谷 新吾 以上 9名
※感謝状贈呈 内海 勝正 渡辺紀久男
杉浦 潤 小林 浩一
滝沢 緑郎
協和美術印刷(株)浅野知一社長

石川忠雄慶應義塾塾長

石川でございます。

本日は慶應義塾体育会柔道部創立100周年のお祝いということで私は喜んで出て参りました。

私は塾長に就任する前は柔道部長であります。僅か数年の柔道部長の期間でありましたけれども、私としては何とかしてこの柔道部を立派な強い部にしたいということで、出来るだけの努力をしてみたいつもりでございます。

なぜ、柔道部が立派な強い部でなければならないのかということは、それには私なりの理由があったからであります。

この柔道部が100年の歴史を閲したということは唯単に100年の年月が流れたということではないのであります。つまり、この100年の中に多くの柔道部の卒業生がみずからこの青春を燃焼させ多くの思い出を学生生活の中に作ってみずからを鍛え、そしてすぐれた人材として世に出て行った。そういったことの連続の歴史がこの100年の歴史なのであります。そういうことから考えて見ましても私は、柔道部というものは立派で強い部でなければならないというふうに考えるわけですが、そのことの他にも実はいくつかの理由があるわけであります。

1つはご承知のように、戦後どの大学でもそうでもありますけれども、正にその大学の規模がどんどん大きくなりました。そうしてその結果として非常にたくさんの学生をどの大学も抱えるようになったわけであります。そのために一体大学の中に何が起こって来たかと申しますと、それはいわゆる大衆社会現象であります。

私学が本来生命ともすべき研学の精神、独特の学風といったものがだんだんと気薄化して行くところといった現象が起きてきたわけであります。私は本年から大学の学生の数を減じて行くつもりでございますけれども、しかしいづれに致しましてもそういうような状況が起きてきた。

私学というものは研学の精神、その上に独自の学風を持つことによってその存在を保ち得るわけでありまして、そういうことがなくなってきて、どの大学もみんな同じ大学であるというような形にな

ったとすれば、私は慶應義塾はすでに存在する意義がないというふうを考えるわけであります。従って、そういう意味で我々はこういった独自の学風、独自の塾風といったものを持ち続けなければならない。そのことを考えますとこの体育会というものは、実はそういうような学風を支える非常に大きな1つの支柱であるということが言えるかと思うのであります。

ご承知のように学風とは何か、塾風とは何か、こういうことを言われましても口でこれを説明することはすこぶる難しいものであります。しかしながら何か独特の気風がその卒業生と学生、教職員との交流・接触を通じて自ずから伝わって行くということは否定すべからぬ事実であります。そういうことが成し得る場というのは一体どこにあるのか。なるほど慶應義塾が大学の規模が小さくて多くの人々がそういったことを行い得るような状況にあった時はいざ知らず、戦後の学生数の増大の中でそういうことが行い得る場はどこにあるかと言えば、私はその1つの大きな場が体育会にあったというふうに言うことが出来ると思うのであります。柔道部もそうであります。この所ではこういう部では先輩と後輩との接触はすこぶる緊密であります。話しているうちに稽古しているうちに、自ずから先輩の体得したものが後輩に伝わって行く、そういうことの素晴らしさというものを我々私学にいるものは考えなければならないし、忘れてはならないというふうに思うのであります。そういうことから考えて見ますと正にこの現在の状況の中で体育会も柔道部も、特に柔道部はそうありますけど私が柔道部長をしておりましたために特にそう思うのかもしれませんが、私はそういった自覚と、そういった昔からの伝統というものを忘れてはならないし、それだけに益々立派なすぐれた強い部にならないといけないということを感じるわけであります。よく言われることですが、“古きが故に尊からず”であります。100年の歴史というものは確かに我々にとって貴重な歴史であります。しかしながら100年をきみしたということが尊いのではないのであります。この100年の伝統をどうやって将来に受け継ぎ、それを将来に生かすかということがむしろむしろ非常に大切なのであります。私はそういう意味合いから申しましても、体育会柔道部が持っているこの先輩と現役、後輩との間の絆を益々強くすることを是非ともお願いを致します。

最近、道場に行ってみますといろいろな機会を作って先輩と現役の学生とがスキヤキ会をやりながら、非常に楽しげに話している所を見かけますけれど、こういったことはもっともっとあってよろしいのであります。先輩諸兄が出来ただけたくさん道場に来て頂きそうして稽古ばかりじゃなくとも、学生といろいろ話合って頂く。そういうような姿をもっともっと強めて頂きたい。只今、阪壱柔道部長のお話を伺っておりまして、私はそういう意味で非常に心強いものを感じたわけであります。私は在任中に一度早慶戦に勝ってから部長を辞めたいというふうに思っておりましたが、それを果すことは出来ませんでした。阪壱先生がそれをやって下さるだろうと期待致しますし又現役の学生、あるいは先輩諸兄がそのことに向って力を合わせて頂くだらうということ信じまして、お祝いの言葉に致します。おめでとうございます。

柔友会報40号より

四季の会

1. 四季の会

2. 戦前の柔道部の先輩と後輩の緊密なタテのつながりが、戦後の一時期とぎれたことから、改めて柔道部OBとしてのタテの交流を進めて、柔友会の支援をしようという発想で故山崎氏（s18）、石渡氏（s19）、奥住氏（s20）、水谷氏（s22）等がレストラン「四季」で会合したことから始まったもので以来会の名称も「四季の会」になっています。会は柔友会の中にある私的な有志の会で、目的を（1）慶應柔道部の支援（2）会員相互の親睦と情報交換会 としています。会員資格は原則として柔友会メンバー、40歳以上です。

3. 発足以来13年（平成13年9月の例会が第50回の開催でした） 歴代の会長は、初代 水谷（s22）、2代 長戸（s32）、3代 鈴木正毅（s34）で現在は 友田（s39）が務めています。

4. メンバーの数は171名、 山岡（s15）、下野川（s18）、石渡英二（s19）等多数の大先輩から、40歳以上の若手までがメンバーです。

5. 事務局 （株）奥住マネジメント研究所内（小峰さん担当）

〒113-0033 東京都文京区本郷2-3-6 聖台ビル3F

Tel. 03-3815-7748 Fax. 03-3812-3634

6. 常連メンバーは、石渡英二（s19）、奥住（s20）、水谷（s22）先輩を始め多数（毎回の出席者数は40名前後）

7, 8. 柔友会のメンバーだけでなく、戦後の混乱期を始めとして種々の事情で途中で柔道部を去った先輩達も含めて柔道部を愛する人達が年3回（3, 9, 12月）集う親睦会です。大先輩と後輩の交流の場、卒業年度の近い人同士の同窓会的役割の場、そして近頃は毎回会員の皆様が興味のある話題を用意しての講演の場として活動しています。（第48回は米国在住の宮崎先輩の紹介で日本で取材中のナショナルジオグラフィック社カリン・ムラー女史の日本体験談、第49回は故羽鳥先輩の柔道の解説ビデオの上映と先輩達の思いで話、第50回は石川元塾長のご出席を頂いてのご講話と朝飛師範による最近の柔道事情の解説を行いました。）古き良き柔道部の伝統を今に伝え、また小回りの利く柔道部の応援部隊の役割ができれば幸いです。

参加ご希望の皆様 大歓迎ですので、事務局までご連絡ください。（友田義輔記）

